

F. 内分泌系（甲状腺以外）

2314 6-ヨウドメチル-19-ノルコレステロール (^{123}I) による副腎シンチグラム

館野之男、穴戸文男、福士清、入江俊章（放医研）
松浦啓一、鴨井逸馬（九大 放） 有水昇、堀田とし子（千大 放） 橋本省三、高木八重子（慶大 放） 井戸達雄（東北大 サイクロ）
小嶋正治、前田稔（九大 薬学） 小川弘、伊藤隆之（第一ラジオアイソトープ）

従来 ^{131}I 標識で用いられていた 6-ヨウドメチル-19-ノルコレステロールに ^{123}I 標識を行ない、その臨床的有用性の評価を行った。

この標識化合物については昭和 53 年度の本学会において動物実験の結果を発表し、昭和 54 年度の本学会に 4 例の臨床例の報告を行なったが、その後数施設の共同研究に進展し、計 40 例の臨床例が集積された。その結果、 ^{123}I の半減期 13.3 時間というのが従来副腎スキュンに使われていた投与後 1 週間ないし 10 日での検査という条件に合わないのではないかと危惧は解消し、投与後 1～3 日で良好なイメージが得られることがわかった。この結果数日間隔での反復検査も可能となった。以上の好結果が得られた主な理由は、 ^{123}I のガンマ線がシンチカメラに適したエネルギーを持つこと、および被曝線量が大幅に軽減されて大量投与が可能になり統計精度の良い画が得られたことにある。

2315 Adrenal Disease 48 例の Scintigraphy による検討

高橋貞一郎、久保田昌宏、大久保 整、津田 隆俊、森田 和夫（札医大 放）

著者等は 1976 年以後 Adrenal Scintigraphy を施行し 48 例の Adrenal Disease (Cushing Disease 2, Cushing Syndrome 8, Primary Aldosteronism 15, Pheochromocytoma 10, Addison Disease 2, Congenital Adrenal Hyperplasia 2, Adrenal carcinoma 2, others 7) を経験した。使用薬剤は ^{131}I Adosterol 23, ^{75}Se Scintadren 25 例であった。此等の scintigraphy につき臨床検査所見とも併せ検討を行ったので報告する。

F

2316 副腎スキュンの診断能の再評価 — 他放射線診断法との比較 —

佐々木常雄、仙田宏平、石口恒男、松原一仁、小林英敏、改井 修、児玉行弘、岡江俊治（名大、放）

副腎疾患の診断に CT 撮影が応用されるに及び、副腎スキュンの診断能について再度評価を試みることは意義のあることと考える。

対象は手術により確認されたクッシング症候群 (CS) 7 例、原発性アルドステロン症 (PA) 9 例、かっ色細胞腫 (PH) 7 例であり、検査方法としては副腎スキュンのほか、副腎静脈撮影、大動脈撮影、CT 撮影である。

CS の 7 例では、副腎スキュン 6/7、副腎静脈撮影 6/7、CT 撮影 3/7 の正診率であった。

PA の 9 例では、副腎スキュン 9/9、副腎静脈撮影 7/9（うち造影失敗 2 例）、CT 撮影 1/7 の正診率であった。

PH の 7 例では、副腎スキュン 0/4、大動脈造影 7/7、CT 撮影 4/4 の正診率であった。

上述のように、副腎スキュンは CS、PA の診断には有用であり、評価は依然として高いが、PH に対しては無力である。従って、これに上述の放射線診断法を併用すれば副腎疾患の診断能は向上する。

2317 Tl-201 および I-123 を用いた副甲状腺サブトラクションイメージングとその臨床的評価

福地 稔、立花敬三、木谷仁昭、尾上公一、前田善裕、浜田一男、木戸 亮、永井清保（兵庫医大、RI）

副甲状腺の imaging は、種々の点で問題が多く、日常臨床上簡便な方法はいまだ確立されていない。最近、福永らにより副甲状腺腫に Tl-201 が摂取されることが報告されたのを契機に、種々の試みがなされつつある。われわれも、Tl-201 と I-123 を用いた副甲状腺腫の computer-assisted subtraction image を検討し、その臨床応用を試みたのでその成績につき報告する。

方法は、I-123 200 μCi 投与、6 時間後に頸部の imaging を行い、30,000 count を 64 $\times$ 64 の frame mode で computer に記録し、引き続き Tl-201 を静注、頸部の imaging を 50,000 count まで同一 frame mode で computer に記録し、subtraction program で image を得た。対象には手術予定の 6 名をあてたが、その内訳は原発性副甲状腺機能亢進症 4 例、続発性副甲状腺機能亢進症 2 例であった。

その結果、false negative は 1 例で、他の 5 例では手術所見と一致した image がえられた。ところが甲状腺腫を合併した 1 例では、その部位も同様に陽性像であった。